

戦争体験談

駒林 良二（大正13年生まれ）

昭和18年6月徴兵検査を甲種合格となり、そして19年9月20日現役召集令状により、糸魚川小学校に150名位全県下より集合して、その日の夜半の臨時列車で九州の門司市に出発。車中泊2日を経て、22日午後門司市に着き、普通の民家に2、3名で泊まり、身体検査及び装具等の準備で、27日門司港より朝鮮の釜山港まで連絡船に出港、夕方釜山港に着き、そして夜半出発。

我々初年兵は県人別に貨物列車に乗せられた。天井に石油ランプ1個吊下げた明りで朝鮮半島を北上し、行き先は全然知らされず不安な日々を重ねていた。吾々の所属部隊は、仙台第2師団でどうも中国大陸方面らしいと言う噂話が流れていたが、本当のところはまだわかっていなかった。

列車が長時間停車すると同乗の戦友は下りて、仲間は段々と減じてゆく。最終的に中国の部隊に着いたときには150名位になっていた。途中満州国の奉天市で列車が停車した時、時間があつたので駅の周辺を歩いたが、9月であるがものすごく寒かったのを覚えている。

山海関を夜半に通過するとき、月明かりで若干見えたが全望できず残念であった。

天津市駅に到着の頃に我々の行く場所が段々とわかってきた。10月5日に中国山西省安邑県運城市に着き、所属部隊名は北支派遣軍勝四二一八部隊工兵隊に入隊。初年兵教育を受ける。

すべて白紙の状態に教育を受けるのだが、今まで自分の行動は自分で操作していたが、初年兵教育は人間の再教育であり、戦友同士の争いであると上官の命令には絶対服従であり、個人の意思は通らなく日々生死をかけた訓練が続いた。

一期検閲を12月27日終了して運城の兵舎を出発。12月29日中支の南京市の獅子山の兵站に着き、我々の親部隊である呂第1941部隊の動行を判明するまでこの兵站で待機する事になった。待機中に正月用の餅の配給があり、少しであったが正月気分を味わえた。待機中なれど、訓練をかかさず。部隊の使役を手伝って南京城をみたり、孫文の墓を見物等日々送っているうちに戦況悪化により、我々は呂部隊のところに行かれない事が決定して、南京上海の都市防衛の部隊に転属することになり、私は戦友50名位と一緒に上海防衛の鷄部隊（東京赤羽工兵71師団）に転属することになって上海に移動し、虹口地区の塗装工場を兵舎に改装して訓練を受けることになった。

戦友は士官候補か下士官候補であり、その教育を受けることになった。訓練は船舶工兵として九九式舟艇操作。トーチカ爆発。そして火炎放射器操作等々の自爆方法の教育を短期間であったが徹底的に教え込まれた。敵兵上陸すれば第一線の戦いとなる事が決められていた。8月に入ってから戦況はかんばしくない様子がちらほら我々初年兵の耳に入ってくる。

広島に特殊な爆弾が投下されたと言う話が伝わってきた。8月15日朝、中隊長より女学校の校庭に正午に集合するよう命令が出た。女学校は上海第二高等女学校と言って、兵舎の近くにあり、女学生の声が聞こえてきていた。

暑い最中、天皇陛下の詔書しやうしょが聞こえたがよく聞こえなく、後で隊長より話で戦争に負けたことを知り、がっかりしたり喜んだり。

2週間くらい後に兵舎を引き払って江湾兵站かうわんへいたんに移り、帰国の時を待つことになる。何日帰る希望は無かったが、20年も暮れて兵站へいたんに收容されて2月1日頃、長雨の続いた朝七時頃、中支の奥地より引き揚げて来る部隊が到着して我々の兵舎に来た。その中の1人の兵士が私を呼び止めて声を掛けた。なんと実の兄であった。驚いた。遠い異国の地で実兄じっけいに逢うなんて嬉しかった。1週間ほど別棟の宿舎であったが2月5日ころ兄の所属部隊は帰って行った。私の無事が早く両親のところに届くので安心した。

私たちの引揚は3月31日で、九州五島列島の桜が満開の中、海防艦上かいぼうかんじょうで花見をしたのを今も忘れない。佐世保港させぼに上陸して列車の都合で2泊して、無事生まれ故郷の柿崎駅に着き、バスにて生まれし家に無事着いて、家族一同喜んで迎えてくれた。それから62年経ってしまった。思えば数々の思い出がよみがえる。